十日の菊

永井荷風

青空文庫

一

庭の山茶花（さざんか）も散りかけた頃である。震災後家を挙げて阪地に去られた小山内（おさない）君がぷらとん社の主人を伴い、倶（とも）に上京してわたしの家を訪（おとな）われた。両君の来意は近年徒（いたずら）に拙（せつ）を養うにのみ力（つと）めているわたしを激励して、小説に筆を執らしめんとするにあったらしい。

わたしは古机のひきだしに久しく二、三の草稿を蔵していた。しかしいずれも凡作見るに堪（た）えざる事を知って、稿半（こなかば）にして筆を投じた反古（ほご）に過ぎない。この反古を取出して今更漉返（すきかえ）しの草稿をつくるはわたしの甚（はなはだ）忍びない所である。さりとて旧友の好意を無にするは更に一層忍びがたしとする所である。

窮余の一策は辛うじて案じ出された。わたしは何故久しく筐底（きょうてい）の旧稿に筆をつぐ事ができなかったかを縷陳（るちん）して、纔（わずか）に一時の責（せめ）を塞（ふさ）ぐこととした。題して『十日の菊』となしたのは、災後重陽（ちょうよう）を過ぎて旧友の来訪に接した喜びを寓するものと解せられたならば幸である。自ら未成の旧稿について饒舌（じょうぜつ）する事の甚しく時流に後（おく）れたるが故となすも、また何の妨（さまたげ）があろう。

二

まだ築地本願寺側の僑居（きょうきょ）にあった時、わたしは大に奮励して長篇の小説に筆をつけたことがあった。その題も『黄昏』と命じて、発端およそ百枚ばかり書いたのであるが、それぎり筆を投じて草稿を机の抽斗（ひきだし）に突き込んでしまった。その後現在の家に移居してもう四、五年になる。その間に抽斗の草稿は一枚二枚と剥ぎ裂かれて、煙管（キセル）の脂（やに）を拭う紙捻（こより）になったり、ランプの油壺やホヤを拭う反古紙になったりして、百枚ほどの草稿は今既に幾枚をも余さなくなった。風雨一過するごとに電燈の消えてしまう今の世に旧時代の行燈（あんどう）とランプとは、家に必須（ひっす）の具たることをわたしはここに一言して置こう。

わたしは何故百枚ほどの草稿を棄ててしまったかというに、それはいよいよ本題に進入（はい）るに当って、まず作中の主人公となすべき婦人の性格を描写しようとして、わたしは遽（にわか）にわが観察のなお熟していなかった事を知ったからである。わたしは主人公とすべき或婦人が米国の大学を卒業して日本に帰った後、女流の文学者と交際し神田青年会館に開かれる或婦人雑誌主催の文芸講演会に臨（のぞ）み一場（いちじょう）の演説をなす一段に至って、筆を擱（お）いて歎息

した。

初めわたしはさして苦しまずに、女主人公の老父がその愛嬢の帰朝を待つ胸中を描き得たのは、維新前後に人と為った人物の性行については、とにかく自分だけでは安心のつく程度まで了解し得るところがあったからである。これに反して当時のいわゆる新しい女の性格感情については、どことなく霧中に物を見るような気がしてならなかった。わたしは小説たる事を口実として、観察の不備を補うに空想を以てする事の制作上甚（はなはだ）危険である事を知っている。それがため適当なるモデルを得るの日まで、この制作を中止しようと思い定めた。

わたしはいかなる断篇たりともその稿を脱すれば、必（かならず）亡友井上唖々子（いのうえああ）を招き、拙稿を朗読して子の批評を聴くことにしていた。これはわたしがまだ文壇に出ない時分からの習慣である。

唖々子は弱冠の頃式亭三馬（しきていさんば）の作と斎藤緑雨（さいとうりょくう）の文とを愛読し、他日二家にも劣らざる諷刺家たらんことを期していた人で、他人の文を見てその病弊を指（してき）するには頗（すこぶ）る妙（みょう）を得ていた。一葉（いちよう）女史の『たけくらべ』には「ぞかし」という語が幾個あるかと数え出した事もあれば、紅葉山人（こうようさんじん）の諸作の中より同一の警句の再三重用せられているものを捜

し出した事もあった。唖々子の眼より見て当時の文壇第一の悪文家は国木田独歩（くにきだどっぽ）であった。

その年雪が降り出した或日の晩方から電車の運転手が同盟罷工（どうめいひこう）を企てた事があった。尤（もっとも）わたしは終日外へ出なかったのでその事を知らなかったが、築地の路地裏にそろそろ芸者の車の出入しかける頃、突然唖々子が来訪して、蠣殻町（かきがらちょう）の勤先からやむをえず雪中歩いて来た始末を語った。その頃唖々子は毎夕新聞社の校正係長になっていたのである。

「この間の小説はもう出来上ったか。」と唖々子はわたしに導かれて、電車通の鰻屋（うなぎや）宮川へ行く途（みち）すがらわたしに問いかけた。

「いや、あの小説は駄目だ。文学なんぞやる今の新しい女はとても僕には描けない。何だか作りものみたような気がして、どうも人物が活躍しない。」

宮川の二階へ上って、裏窓の障子（しょうじ）を開けると雪のつもった鄰の植木屋の庭が見える一室に坐るが否や、わたしは縷々（るる）として制作の苦心を語りはじめた。唖々子は時々長い頤（あご）をしゃくりながら、空腹（すきっぱら）に五、六杯引掛（ひっか）けたので、忽（たちま）ち微醺（びくん）を催した様子で、「女の文学者のやる演説なんぞ、わざわざ聴きに行かないでも大抵様子はわかっているじゃないか。講釈師見て来たような虚言（うそ）をつき。そこが芸術の芸術たる所以（ゆえん）だろう。」

「それでも一度は実地の所を見て置かないと、どうも安心が出来ないんだ。一体、小説な

んぞ書こうという女はどんな着物を着ているんだか、ちょっと見当がつかない。まさか誰も彼もまがいの大嶋と限ったわけでもなかろうからね。」

「僕にも近頃流行るまがい物の名前はわからない。贋物には大正とか改良とかいう形容詞をつけて置けばいいんだろう。」と唖々子は常に杯を放さない。

「ああいう人たちのはく下駄は大抵籐表の駒下駄か知ら。後がへって郡部の赤土が附着いていないといけまいね。鼻緒のゆるんでいるとこへ、十文位の大きな足をぐっと突込んで、いやに裾をぱっぱっとさせて外輪に歩くんだね。」

「それから、君、イとエの発音がちがっていなくッちゃいけないぜ。電車の中で小説を読んでいるような女の話を聞いて見たまえ。まず十中の九は田舎者だよ。」

「僕は近頃東京の言葉はだんだん時勢に適しなくなって来るような心持がするんだ。普通選挙だの労働問題だの、いわゆる時事に関する論議は、田舎訛がないとどうも釣合がわるい。垢抜けのした東京の言葉じゃ内閣弾劾の演説も出来まいじゃないか。」

「そうとも。演説ばかりじゃない。文学も同じことだな。気分だの気持だのと何処の国の訛だかわからない言葉を使わなくっちゃ新しく聞えないからね。」

　唖々子はかつて硯友社諸家の文章の疵累を指したように、当世人の好んで使用する

流行語について、例えば発展、共鳴、節約、裏切る、宣伝というが如き、その出所の多くは西洋語の翻訳に基くものにして、吾人（ごじん）の耳に甚快（はなはだよか）らぬ響を伝うるものを列挙しはじめた。

「そういう妙な言葉は大抵東京にいる田舎者のこしらえた言葉だ。そういう言葉が流行するのは、昔から使い馴れた言葉のある事を知らない人間が多くなった結果だね。この頃の若い女はざっと雨が降ってくるのを見ても、あらしもよいの天気だとは言わない。低気圧だとか、暴風雨だとか言うよ。道をきくと、車夫のくせに、四辻の事を十字街だの、それから約一丁先だのと言うよ。ちょいと向の御稲荷（おいなり）さまなんていう事は知らないんだ。御話にやならない。大工や植木屋で、仕事をしたことを全部完成ですと言った奴があるよ。銭勘定（ぜにかんじょう）は会計、受取は請求というのだったな。」

唖々子の戯（たわむ）るるが如く、わたしはやがて女中に会計なるものを命じて、倶（とも）に陶然として鰻屋の二階を下りると、晩景から電車の通らない築地の街は、見渡すかぎり真白（まっしろ）で、二人のさしかざす唐傘（からかさ）に雪のさらさらと響く音が耳につくほど静であった。わたしは一晩泊って行くように勧めたが、平素健脚を誇っている唖々子は「なに。」と言って、酔に乗じて本郷の家に帰るべく雪を踏んで築地橋の方へと歩いて行った。

三

同じ年の五月に、わたしがその年から数えて七年ほど前に書いた『三柏葉樹頭夜嵐（みつかしわこずえのよあらし）』という拙劣なる脚本が、偶然帝国劇場女優劇の二の替（にのかわり）に演ぜられた。わたしが帝国劇場の楽屋に出入したのはこの時が始めてである。座附（ざつき）女優諸嬢の妖艶なる湯上り姿を見るの機を得たのもこの時を以て始めとする。但し帝国劇場はこの時既に興行十年の星霜を経ていた。

わたしはこの劇場のなおいまだ竣成（しゅんせい）せられなかった時、恐らくは当時『三田文学』を編輯（へんしゅう）していた故であろう。文壇の諸先輩と共に帝国ホテルに開かれた劇場の晩餐会に招飲せられたことがあった。尋（つい）でその舞台開（ぶたいびらき）の夕（ゆうべ）にも招待を受くるの栄（えい）に接したのであったが、褊陋（へんろう）甚しきわが一家の趣味は、わたしをしてその後十年の間この劇場の観棚（かんぽう）に坐することを躊躇（ちゅうちょ）せしめたのである。その何がためなるやは今日これを言う必要がない。

今日ここに言うべき必要あるは、そのかつて劇場に来（きた）り看（み）る事の何故に罕（まれ）であったかという事よりも、今遽（にわか）に来り看る事の何故頻繁になったかにあるであろう。拙作『三柏葉樹

頭夜嵐』の舞台に登るに先立って、その稽古の楽屋に行われた時から、わたしは連宵(れんしょう)帝国劇場に足を運んだのみならず、折々女優を附近のカッフェーに招き迎えシャンパンの盃(さかずき)を挙げた。ここにおいて飛耳長目(ひじちょうもく)の徒は忽ちわが身辺を揣摩(しま)して艶事(つやごと)あるものとなした。

巴里(パリー)輸入の絵葉書に見るが如き書割裏の情事の、果してわが身辺に起り得たか否かは、これまたここに語る必要があるまい。わたしの敢えて語らんと欲するのは、帝国劇場の女優を中介にして、わたしは聊(いささか)現代の空気に触れようと冀(こいねが)ったことである。久しく薗八(そのはち)一中節(いっちゅうぶし)の如き古曲をのみ喜び聴いていたわたしは、褊狭(へんきょう)なる自家の旧趣味を棄てて後(おく)れ走(ば)せながら時代の新俚謡(しんりよう)に耳を傾けようと思ったのである。わたしは果してわたしの望むが如くに、唐桟縞(とうざんじま)の旧衣を脱して結城紬(ゆうきつむぎ)の新様(しんよう)に追随する事ができたであろうか。

現代思潮の変遷はその迅速なること奔流(ほんりゅう)もただならない。旦(あした)に見て斬新となすもの夕(ゆうべ)には既に陳腐となっている。槿花(きんか)の栄(えい)、秋扇(しゅうせん)の嘆(たん)、今は決して宮詩をつくる詩人の間文字(かんもじ)ではない。わたしは既に帝国劇場の開かれてより十星霜を経たことを言った。今日この劇場内外の空気の果して時代の趨勢を観察するに足るものであったか否か。これまた

各自の見るところに任すより外はない。

　わたしは筆を中途に捨てたわが長編小説中のモデルを、しばしば帝国劇場に演ぜられた西洋オペラまたはコンセールの聴衆の中に索（もと）めようと力（つと）めた。また有楽座に開演せられる翻訳劇の観客に対しては特に精細なる注意をなした。わたしは漸（ようや）くにして現代の婦人の操履（そうり）についてやや知る事を得たような心持になった。それと共にわたしはいよいよわが制作の困難なることを知ったのである。およそ芸術の制作には観察と同情が必要である。描かんとする人物に対して、著作者の同情深厚ならざるときはその制作は必ず潤（うるお）いなき諷刺に堕（お）ち、小説中の人物は、唯作者の提供する問題の傀儡（かいらい）たるに畢（おわ）るのである。わたしの新しき女を見て纔（わずか）に興を催し得たのは、自家の辛辣（しんらつ）なる観察を娯（たの）しむに止（とど）まって、到底その上に出づるものではない。内心より同情を催す事は不可能であった。わたしの眼底には既に動しがたき定見がある。定見とは伝習の道徳観と並に審美観とである。これを破却するは曠世（こうせい）の天才にして初めて為し得るのである。

　わたしの眼に映じた新らしき女の生活は、あたかも婦人雑誌の表紙に見る石版摺（せきばんずり）の彩色画と殆（ほとんど）撰ぶところなきものであった。新しき女の持っている情緒は、夜店の賑（にぎわ）う郊外の新開町に立って苦学生の弾奏して銭を乞うヴァイオリンの唱歌を聞くに等しきものであっ

た。

小春治兵衛（こはるじへえ）の情事を語るに最も適したものは大阪の浄瑠璃である。浦里時次郎（うらざとときじろう）の艶事を伝うるに最適（もっとも）したものは江戸の浄瑠璃である。マスカニの歌劇は必（かならず）伊太利亜（タリア）語を以て為されなければなるまい。

然らば当今の女子、その身には窓掛に見るような染模様の羽織を引掛け、髪は大黒頭巾（だいとくずきん）を冠（かぶ）ったような耳隠しの束髪に結（ゆ）い、手には茹章魚（ゆでだこ）をぶらさげたようなハンドバッグを携え歩む姿を写し来って、宛然（さながら）生けるが如くならしむるものはけだしそのモデルと時代を同じくし感情を倶（とも）にする作家でなければならない。

江戸時代にあって、為永春水（ためながしゅんすい）その年五十を越えて『梅見の船』を脱稿し、柳亭（りゅうてい）種彦（ねひこ）六十に至ってなお『田舎源氏』の艶史を作るに倦（う）まなかったのは、啻（ただ）にその文辞の才能（よ）くこれをなさしめたばかりではなかろう。

四

築地本願寺畔の僑居（きょうきょ）に稿を起したわたしの長篇小説はかくの如くして、遂に煙管（キセル）の

脂（やに）を拭う反古（ほご）となるより外、何の用をもなさぬものとなった。

しかしわたしはこれがために幾多の日子（にっし）と紙料とを徒費したことを悔（く）いていない。わたしは平生（へいぜい）草稿をつくるに必ず石州製の生紙（きがみ）を選んで用いている。西洋紙にあらざるわたしの草稿は、反古となせば家の塵（ちり）を掃（はら）うはたきを作るによろしく、揉（も）み柔（やわら）げて厠（かわや）に持ち行けば浅草紙（あさくさがみ）にまさること数等である。ここに至って反古の有用、間文字（かんもじ）を羅列したる草稿の比ではない。

わたしは平生文学を志すものに向って西洋紙と万年筆とを用うること莫（なか）れと説くのは、廃物利用の法を知らしむる老婆心に他ならぬのである。

往時、劇場の作者部屋にあっては、始めて狂言作者の事務を見習わんとするものあれば、古参の作者は書抜の書き方を教ゆるに先だって、まず見習をして観世捻（かんぜより）をよらしめた。拍子木（ひょうしぎ）の打方を教うるが如きはその後のことである。わたしはこれを陋習（ろうしゅう）となして嘲（あざけ）った事もあったが、今にして思えばこれ当然の順序というべきである。観世捻をよる事を知らざれば紙を綴（と）ずることができない。紙を綴ることを知らざれば書抜を書くも用をなさぬわけである。事をなすに当って設備の道を講ずるは毫（ごう）も怪しむに当らない。或人の話に現時操觚（そうこ）を業となすものにして、その草稿に日本紙を用うるは生田葵山子（いくたきざんし）とわたしとの

二人のみだという。亡友唖々（ああ）子もまたかつて万年筆を手にしたことがなかった。千朶山房（せんださんぼう）の草稿もその晩年『明星』に寄せられたものを見るに無罫（むけい）の半紙（はんし）に毛筆をもって楷行を交えたる書体、清勁暢達（せいけいちょうたつ）、直にその文を思わしむるものがあった。

わたしはしばしば家を移したが、その度ごとに梔子（くちなし）一株を携え運んで庭に植える。啻（ただ）に花を賞するがためばかりではない。その実を採って、わたしは草稿の罫紙（けいし）を摺（す）る顔料となすからである。梔子の実の赤く熟して裂け破れんとする時はその年の冬も至日（しじつ）に近い時節になるのである。傾きやすき冬日の庭に塒（ねぐら）を急ぐ小禽（ことり）の声を聞きつつ梔子の実を摘（つ）み、寒夜孤燈の下に凍（こご）ゆる手先を焙（あぶ）りながら破れた土鍋（どなべ）にこれを煮る時のいいがたき情趣は、その汁を絞って摺った原稿罫紙に筆を執る時の心に比して遥に清絶であろう。一は全く無心の間事（かんじ）である。一は雕虫（ちょうちゅう）の苦、推敲（すいこう）の難、しばしば人をして長大息（ちょうたいそく）を漏らさしむるが故である。

今秋不思議にも災禍を免（まぬか）れたわが家（や）の庭に冬は早くも音ずれた。筆を擱（お）いてたまたま窓外を見れば半庭の斜陽に、熟したる梔子燃（もゆ）るが如く、人の来って摘むのを待っている……。

大正十二年癸亥（きがい）十一月稿

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店
1986（昭和61）年11月17日第1刷発行
2007（平成19）年7月13日第23刷発行
底本の親本：「荷風随筆　一～五」岩波書店
1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月
※底本はこの作品で「門＜日」と「門＜月」を使い分けており、「間文字」と「間事」では、「門＜月」を用いています。
入力：門田裕志
校正：阿部哲也
2010年3月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十日の菊

永井荷風

２０２０年　７月１８日　初版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　http://aozora.xisang.top/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/